

Samita Sen,

*Women and Labour in  
Late Colonial India : The  
Bengal Jute Industry.*

Cambridge : Cambridge University Press,  
1999, xviii + 265pp.

かわ い あきのぶ  
河 合 明 宣

はじめに

植民地期インドの社会経済史に関心を持つ者にはきわめて魅力的なタイトルである。実際、近年研究が進むジュート工業史の成果[Goswami 1991; Chakrabarty 1989]を吸収し、広範な史料収集にインタビューを加え、インド賃労働史と労働のジェンダー化の具体的プロセスを明らかにした手堅い実証研究である。

まず、ジュート工業の位置づけを述べる。1854～56年のクリミア戦争によって、すでに工場制製麻工業の中心となっていたスコットランドのダンジーへのロシアからの亜麻の供給が途絶え、ベンガル地方のジュートが代替物として重要になった。

ジュートは、弾力性にも耐久性にも欠け、漂白が難しく、吸湿性が高いため、衣料織物には適さず、他の繊維より劣っていた。しかし、原料が多産、きわめて安価で、かつ容易な紡績工程もあって、1日で原料から製品が完成する迅速性は、各種一次製品の梱包用品として他の追随を許さない独特の長所となった。なかでも高温多湿な気候と河川の氾濫による地力維持、安価で豊富な労働力を有する小農民経営の存在という条件下でベンガル産ジュートは、価格において他の追随を許さず、19世紀後半には栽培が爆発的に拡大していった。

1855年、カルカッタ近郊で河川交通の要の地フー

グリー(Hooghly)河岸に最初のジュート工場がヨーロッパ資本によって建設され、以後工場数は増加した。19世紀末までには、ダンジーと競争し、オーストラリア、ニュージーランド、アメリカ市場においてベンガル産ジュートはトウモロコシ、ふすま、羊毛、小麦などの梱包用の麻袋(ガニー)としてシェアの大半を奪った。アメリカ市場は、1913年までにカルカッタ産ジュート製品の40%を吸収した。また、戦時期には土囊としてのジュート袋の莫大な需要が生まれ、ジュート資本に未曾有の利益をもたらした。梱包用麻袋は、世界市場で取引された一次製品の増加に歩調を合わせて増加し、その約9割はベンガル産となった。ジュート作農民、ジュート工場労働者、仲買業者、工場経営者に至る膨大な人口を支える「ジュート経済」はベンガル経済の基盤となり、ジュート工業は20世紀初頭には綿業と肩を並べ、インド最大の外貨獲得産業となった。1929年に始まる世界大恐慌期にジュート価格は暴落したが、ジュート資本は原料価格の引き下げと労賃カットを通して利益を確保した。しかし、長期化した不況期には、小農民経営の困窮、解体による農村の不安定化、頻発する労働争議は、独立を要求する民族運動を加速することになった。

繊維工業の労働力構成は、一般的に女性および年少労働者、不熟練および半熟練労働者の比率がきわめて高い。女性労働者比は、全工業部門平均の2倍ほどであった。1931年でインドの繊維工業労働者中、ジュート工業労働者は7%であった。問屋制マニファクチュアおよび家内労働も含めての綿工業の労働者は多数の女性労働者で構成され、綿工業全体の75%を占めていた。インド繊維工業の女性労働者比は40%(日本:1930年64%)であり<sup>(注1)</sup>、そのうちジュート工業労働者は、1929年で最大数の34万人弱、女性労働者比は19世紀後半で約15%、20世紀初頭で20%強のピークに達し、以降29年の大恐慌まで15%から16%台を推移し、以後は漸減、分離独立後の50年で12%になる。

工業化初期の女性労働者の存在は、従順で労賃が非常に安いこと、茶プランテーション労働者では特に重視された労働力の再生産を受け持つこと、家計

補助的であり低賃金で足ることから説明される。しかし、著者はジュート工業女性労働者が少ないのは何故かと設問する。女工が中核労働者であった日本の機械制製糸業とは対照的であった。

## I 内容の紹介

章の構成は以下のとおりで、章別に要約する。

はじめに

第1章 出稼、募集、労務管理

第2章 農地は耕されなくてもよいのか——農村経済における女性労働

第3章 故郷を遠く離れて——工場での女性労働

第4章 母性、育児方法、出産手当

第5章 「一時婚」——主婦、寡婦、売春婦

第6章 労働者階級の政治と女性の戦闘性

第1章——ジュート工業における賃労働成立過程は、(1)20世紀初頭までの工場周辺地域社会から排除された労働力に依存した時期、(2)遠隔地からの男性単身出稼労働供給の確立時期、(3)1929年世界大恐慌期以降、に分けて考察されている。この時期区分の下で出稼の形態の変化と出稼が女性労働に与える影響が分析される。

まず、フーグリュイ県でジュート工場が操業を始め、近隣から貧農、生活困窮者、綿織物やジュート手織業の織工などを労働者として雇用した。初期のジュート女性労働者は、未亡人やさまざまな理由で家族に見捨てられた女性で、農村では生活の術を全く失い、都市でしか生きられない存在であった。多くは2～3マイルの距離から通う地域の女性労働者の比率は今世紀初頭で最大となった。

工場が増えた1880年代後半には熟練工不足に直面した。しかし、ビハール、ウッタラプラデシュ、オリッサ、アンドラプラデシュ北部などからの州を越えた流入労働者の次の3つの流れによって、20世紀初頭にはカルカッタ労働市場は過剰に転換した。

(1)ビハールやベンガル西部から冬の初めに稲刈りのためにベンガル東部にやってきて、その後鉄道や道路工事などに携わり農繁期の夏の初めに故郷に帰

る季節出稼労働者。

(2)ウッタラプラデシュ、ビハール、中央州からイギリスや他の外国で働く目的で斡旋人によってカルカッタに集められ、船で海外へ送り出された契約労働者。

(3)ベンガル北部やアッサムなどの茶園労働者。

ジュート工業はこうした3つの労働移動の要に位置したことにより、口入れ業者などの職業紹介機関に依存せず安価な労働者を十分に確保しえた。

1880年代には、ジュート作柄の季節変動に加え、冠婚葬祭などを理由とした欠勤や遅刻、熟練工化したベンガルの男性労働者による労働条件改善を求めるストライキの頻発などに対処せざるをえなくなった。ビハールやウッタラプラデシュ東部の奥地(up-country)出身の労働者が好ましいと判断され、1890年までにジュート労働者の約半数はこうした人々に替わった。不熟練工であるベンガルの女性労働者はかかる男性労働者に代替され、20世紀初頭までにベンガル女性の就労比率は低下した。これは、ベンガルの男性が熟練工化し、賃金所得が増加したため家計補助的女性労働の必要性が薄れたこと、1881年、初めて工場法により女性労働に対する規制が強化されたことによる。1914年には奥地出身者の流入は需要を超え、ジュート資本は伸縮自在な過剰な労働者により労務管理を強化しうる基盤を得たのである。

こうして家族を農村に残した男性単身出稼労働者(unsettled settlers)の過剰なプールが出来あがり、「男子一循環」(male and circular)型労働供給が労働市場の基本構造をなした。季節出稼労働者は、家族を農村に残し、再生産の費用を農村に委ね、劣悪な労働環境に耐え、懸命に働き、雇用の増減にきわめて柔軟に対応した。1～3カ月間の帰郷で精神的紐帯を確かめ、低い農業所得補充のためにジュート工場の低賃金労働に帰っていくのであった。また不安定な就業と生活に対応するためにカルカッタにおいてカースト、宗教、農村で築かれた関係が強化された。

1930年代にILOの影響下で労働条件改善のために立法化が進むが、工場を頻繁に替え、また病気に

なれば帰郷するため、実効はきわめて限定されることとなった。ジュート工業の賃労働は、インフォーマルセクターの不熟練労働と異なることはなかった。

第2章——地代支払いや負債返済のために送金する農村出稼労働の進展を背景に、減少した家族労働を補って農作業から家事労働までにも従事せねばならない農民世帯の女性や子供の労働に対する評価が1860年代から変わってきた。ビハール、ウッタルプラデシュでは主作の収穫終了後、11月～1月に始まるベンガル農村へ向けての農業季節出稼が女性労働強化に拍車をかけた。村に残された女性労働は、コメの脱穀・調整、農産物販売、薪炭を含む森林産物の採集・販売などの農業関連の生業も含め多様化し、労働は強化されたが、報酬もその評価も低下した。家計維持の重要性にもかかわらず、男性賃金収入に対し補充的、マージナルなものと捉えられた。犁耕は男子、除草は女性というように農作業におけるジェンダーの差異化も進む。男性の出稼で女性が残る、また多様な場面で働くことで男子との接触機会が増えたことは、逆に男女の接触を制限したパルダ制の広がりに関連していく。

一方、土地や資産を持つ者によって「女性は家庭」およびジェンダーの差異化という新しい規範が採用されていった。また19世紀後半においてベンガルのエリートは、ナショナリズムという言説の基底として、家庭という領域に新たに構成した伝統の概念を据えた。家庭的であることは、女性に体现されるのである。社会改良主義者たちは、理想の主婦、理想の母像を掲げた。

女性労働の価値低下により、未婚女性を長く世帯に留める意味が希薄化され、さらに女性の扶養は家計負担の増加と見なされ、19世紀末頃から幼児婚や望ましい職業や上位カーストの相手に嫁がせる場合のダウリ（持参財、婚資）の普及を促進したと捉えられている。また、女性労働の価値低下が、20世紀初頭のベンガルにおけるダウリの広まり、寡婦再婚に対する制限強化、パルダ制や幼児婚の普及などのきわめて重要な社会変化を説明する鍵であることが指摘されている。

第3章——以上がジュート工業女性労働を理解する経済的前提である。ジュート工場には原料から製品までの全ての工程が存在するが、19世紀末頃からある工程に限って女性労働者を雇用する方針に転換した。女性労働者は未熟練であることと家庭における役割を理由に低賃金部門へ配置換えし、雇用調整では解雇した。こうした女性労働の管理は、手仕事などの反復作業は女性の家事技能に関連させ、機械による紡績や紡織などは男子独特の技能に関連させる、当時広まっていたジェンダーについてのイデオロギイに結びつけて正当化された。

「女性は家庭」の概念は、女性労働が必要な場合には家計補助の強調、労働力を削減する時には家事や育児の重要性の強調と、恣意的に用いられた。低賃金と劣悪な労働条件が正当化され、ジュート工業における女性労働は付随的な位置づけとなったが、男性出稼労働をますます引き下げる機能を持った。女性の深夜労働禁止、労働時間制限（1日11時間まで）などを決めたベンガル州初の工場法は1881年に成立したが、不合法化された就業のために監督（sardar）などへの賄賂が必要となり、女性、年少労働者の労働条件はより劣悪化した。1930年代の恐慌期で経営危機に直面すると、低賃金創出機構であった女性労働者は、機械化や男子によって置き換えられ、残った女性労働者に対しては入念な労務管理により労働が強化された。

作業工程の性差別化は、女性労働に対する社会的、文化的態度に影響を与え、また都市に住む女性の地位も引き下げるという結果をともなった。劣悪な労働条件と低賃金という状況は、女性は家事労働というイデオロギイと結びつき、女性が家庭に留まる傾向を強めた。これはパルダ制の広がりに関連し、ジュート工場での女性の低賃金は、家事に専念することが可能である経済力を持つ世帯に嫁がせるためにダウリを普及させる背景になったと指摘されている。

第4章——第1次大戦後の1920年代、30年代にはILOの活動により労働条件一般は改善され、女性労働者、特に貧しい女性の出産と育児が健全な労働者家族の再生産と関連させて社会の特別な関心を集めるようになった。「母であること」(motherhood)

の観点から、政府は女性労働者である母親と幼児の高い死亡率を問題とする一方、工場はすでにイギリスで関心を集めていた育児の方法 (mathercraf) に焦点を当てた。母性は学びとる技能であると規定することにより、高い死亡率の原因は、貧しい女性の責任にされた。貧しい女性労働者は無知で教養もなく、よい母親にはなれず、生まれてくる子供の生命は母親の工場労働によって危険に曝され、粗雑な腕前の産婆により死亡や病気が引き起こされることになるというのである。工場主は州政府の助けを借りて、安上がりな出産手当や他の厚生政策に代わる便法として、診療所の開設や赤ちゃんコンクールを導入した。こうした厚生政策は、一方ではミドルクラス女性の医療関係者などによる貧しい女性の生存に対する影響力を増大させ、他方では、工場主による女性労働の管理強化につながり、不況の1930年代には解雇の口実として効果的に利用された。出産手当法は、ベンガル州ではジュート資本の利益が重視され、1929年ボンベイ州での最初の成立からは大幅に遅れ、ジュート工業の停滞で生産調整が不可避になって初めて、1939年に成立した。

第5章——1920年代の急速な都市化を背景に、労働者居住区における疾病、犯罪、売春（低賃金の補完）が増え、これについてのミドルクラスによる言説が急激に増えた。工場労働者の貧困や生活の乱れは、单身男性中心の出稼、急速な都市化と工業化、男女役割分担の崩壊などによるとされた。

他方、ミドルクラス（郷紳, bhadralok）は、社会的地位の誇示のために19世紀末には独自の生活スタイルを確立した。女性は家にいて、教養を身につけ、家庭の役割を果たすことが期待された。こうして、家庭外での女性の活動はいかなるものでも、低賃金の補完として売春する「不道德」な、貧しい工場労働者のそれと同一視される傾向が強まった。官僚とミドルクラスの発表する文章では、貧民は性的に乱雑であるとし、パラモンの規範である神聖な結婚と、低カーストの間に広まっている離婚、再婚、「一時婚」(temporary marriage)、寡婦再婚とが鮮明に区別され、後者は不法行為、逸脱とされた。ジュート工業女性労働者の貧困に対する社会の関心

は、彼女たちの性的な乱雑さを強調することによりミドルクラスの価値規範である「女性の家庭的役割」を強化する結果となった。

植民地政府は都市貧民の多様な性的関係と婚姻関係を「一時婚」と一括し、カルカット労働者に特有な不道德な行為と決めつけた。これらの不道德な行為に対しての法的規制すなわち、結婚についてのパラモンのいくつかの規範に植民地法制を与え、低カースト貧民を規制する目的で「一時婚」の女性に対して、「妻」としての法律上の地位を否定した。しかし同法律は、女性労働者は貧しく孤立しているがゆえに性的関係と引き替えに男子に依存するという事実を無視した結果、男女の関係を一層不安定化させた。暴力や収奪を行う男性から逃れるために女性は法律に訴え、「夫」とっては、女性労働と性 (sexuality) に対しての支配権を確立することが法的に不可能となった。

第6章——ジュート労働者を事例として、1920年代、30年代のジェンダーと階級の相互作用の問題を扱う。女性労働者は少数となったが、従順ではなく、労働争議への参加は組織的ではないが活発であった。ストライキの成功には女性労働者の参加が不可欠で、労働組合は女性を動員するためにミドルクラスの女性を雇用したり、労働運動のリーダーになるミドルクラス女性の活動家が現れた。しかし、労働組合は、女性労働がジェンダーによる差別化を受けていることに対し、明確な問題提起をしなかった。その結果、男性労賃が上がっても、不熟練工である女性の労賃は低いままであり、1930年代の機械化がこれに拍車をかけた。

また、女性労働者にとって、家庭に対する責任には労賃所得が含まれるので、賃労働と「女性の家庭的役割」(family role) との対立は意識されなかった。しかし、女性は家庭を守る (domestic) というエリート階層の考えが、政府と企業の政策を通して、次第に影響を強め、働く女性はこうした考えに対抗し、階級のおよび性的抑圧と戦わなければならなかった。1920年代、30年代、女性労働者がストライキ中に工場側と警察とに対し激しい争議を展開することは評判となった。しかし、ジェンダー問題を

訴える争議での戦闘性は、エリート指導の労働組合運動の組織のあり方とは無縁で、男子労働者の援助やコミュニティでの女性の自尊心や体面の保持への意志から生まれたもので、当該期における女性の限定を突き崩せなかった。経済階層とカーストのヒエラルキーを持つ社会で、労働運動の高揚にもかかわらず弱い部分を切り捨てる構造は不変であった。

## II 論点とコメント

以上の要約で示されるように、19世紀後半からの労働者の移動の3つの流れは、植民地ベンガルでの工業化と小農民経営の変容による賃労働者の形成過程の特質を示すと言える。国民経済という大枠の中で、小農民経営における女性労働の変容が具体的に描かれている。農業部門と関連させて家計補助的な男性単身出稼の構造を明らかにし、工場における女性労働はかかる男性の低賃金を支え、かつその低賃金構造を補完していることが明らかにされる。社会経済史の実証的な分析(第1, 2, 3章)により、ジェンダー問題がきわめて具体的、明瞭に提示されている。

商業、移民、労働、教育、総務、公衆衛生、司法、政治、警察、農業などの各分野の行政資料を網羅的に収集した成果は、第2章の農業関連の女性雑業の描写や、第3章におけるジュート工業の女性労働者の具体的把握に遺憾なく発揮されている。ジェンダーに焦点をあてた第4, 5, 6章では、イギリスとインド両国で収集した公文書、商工会議所年次報告書、ジュート工場の経営資料、新聞、雑誌、小説、伝記にインタビューで得た知見を加えることにより、経済的、社会的に底辺で暮らすベンガル女性を社会経済史と関連させてヴィヴィッドに把握することに成功している。

文書史料の斬新的な利用と、明晰な問題意識に貫かれた本書は、ベンガル近代史では豊富な研究蓄積を持つ経済史や1980年代初頭から注目されてきたサバルタン研究と多くの論点を共有している。サバルタン研究は、民衆史、社会史において多くの成果を生み出してきたが、ジェンダーに対する関心が手薄

であり[粟谷 1999, 216]、また実証的な歴史研究との接点も希薄である[グハ他 1998, 354]とされる。本書はこうした点を克服する具体的方法を提示した研究と評価できる。

さらに、近代のアジア諸国を比較史的に検討するという課題[Robb, Sugihara and Yanagisawa 1996; 隅谷 1976, 88-98]に対して、ベンガルの事例分析であるが、賃労働成立過程と労働市場の構造におけるインドと日本の特質を一層明瞭にする分析内容を有している。ジュート工業では女性労働者が少ないとする著者による指摘は、植民地本国の資本が進めた工業化と農民層分解の特性と関連する。大土地所有者を機軸とする土地政策により生み出された貧農、土地なし層の存在、工業部門における狭隘な労働市場、大土地所有者、植民地官僚機構、貿易商人を主な住民とする急速に肥大化した植民地都市の形成が、労働市場の性格を規定した。男性単身出稼型労働供給が永続化・固定化しているのである。また、新しい研究が生まれている、開発と女性(WID)や、ジェンダーの分野における比較史的な検討についても本研究が示唆する点は多く、議論に幅広い視野を与えると考えられる。

しかし、カーストやジェンダーに関するベンガル社会改革の課題であるダウリ、幼児婚、バルダ制、寡婦の再婚問題などを「ジュート経済」変動、すなわち女性労働の価値の低下と関連させる経済的要因重視の説明には、一面的で分かりにくい点があると思われる。また、第2章ではナショナリズムの高揚を背景にミドルクラスの間に普及した「女性は家庭」イデオロギイが論じられていて(pp.56-60)、重要で興味深い課題であるが、本書全体の論旨の展開で見れば説明が不足している。これらの解明は女性が自立するための課題でもある。しかし、サバルタン研究が示すようにインド近代史の近年の成果は幅広い関心を集めている。インド近代史を豊富にした本研究の意義はこの点でも注目される。

(注1) 1936年、ILOが開催した繊維工業における社会状態の改善を討議する会議用資料[ILO 1936]。

## 文献リスト

## &lt;日本語文献&gt;

- 粟谷利江 1999. 『『サバルタン・スタディーズ』の軌跡とスピヴァクの＜介入＞』『現代思想』27(8).  
 グハ・R他 1998. 『サバルタンの歴史——インド史の脱構築——』(竹中千春訳) 岩波書店.  
 隅谷三喜男 1976. 『労働経済論』(第2版) 筑摩書房.

## &lt;英語文献&gt;

- Chakrabarty, Dipesh 1989. *Rethinking Working-Class*

*History, Bengal 1890-1940*. Princeton: Princeton University Press. (Indian ed., New Delhi: Oxford University Press, 1989)

Goswami, O. 1991. *Industry, Trade and Peasant Economy: The Jute Economy of Eastern India, 1900-1947*. Delhi: Oxford University Press.

ILO 1936. "The Tripartit Technical Conference on the Textile Industry". (翻訳: 『世界繊維工業』大日本紡績連合会訳 千倉書房 258-259)

Robb, P., K. Sugihara and H. Yanagisawa 1996. *Local Agrarian Societies in Colonial India: Japanese Perspectives*. London: Curzon Press.

(放送大学助教授)